

里川・里海の教材化

○服部 博司^A、広木 正紀^B、村上忠幸^B

HATTORI Hiroshi^A、HIROKI Masanori^B、MURAKAMI Tadayuki^B

*南丹市立吉富小学校 (平成17年度京都教育大学研究生)^A、京都教育大学^B

*旧八木町

【キーワード】 小学校理科、里川、里海、里、地域の自然

1. はじめに

校区に自然豊かな川や海などの水環境、すなわち「里川・里海」が存在するとき、理科の授業におけるその自然の教材化を京都教育大学における京都府現職教育職員長期派遣研修の研修テーマとして取り組んだ。

2. 本研究における「里」の定義

【里とは】

「里」を取り上げたいくつかの資料^{1, 2, 3)}より、「里」には、次の4つの意味が含まれることが分かった。

- ・ ヒトが形成・維持している二次的な自然
- ・ 二次的な自然が形成・維持されるシステム
- ・ 自然と共に人が暮らしている場所や地域
- ・ ヒトの生き方の方向性

【本研究では……】

その場所の自然が、憩いの場や学習資源として活用される、すなわち、地域の人々に親しまれている川や海を「里川・里海」とする。ただし、児童に対して「里」という言葉を使うのではなく、教師が「里」の意識を持って授業を行うことを想定している。

3. 教科書の中での地域の身近な自然の扱われ方

これまで、校区に海や川が存在する小学校に勤務してきた。しかし、そういった地域の身近な海や川を教材として授業を行う機会は、総合的な学習の時間にはあったものの理科ではなかった。

そこで、「理科」において、地域の水辺の生き物を教材とする学習が少ない原因を教科書から分析することにした。すると、フィールドに出かけて生き物と出会う学習が極端に少ないことが分かった。

4. まずはフィールドでの生き物との出会いから

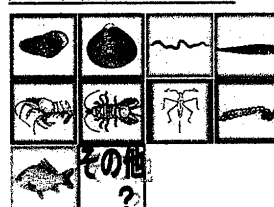
里川・里海の教材化にあたっては、まずは、フィールドで、安全かつ簡単に生き物と出会うことから始めることが大切である。

そこで、海と川において、上が開放されたかごに何かを設置しそれを沈めるだけで生き物と出会うことができるか調査を行った。

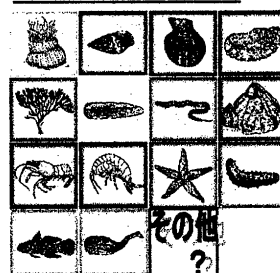
- * 設置したかごは、A4版の紙を入れるための小さなかごで、全体に正方形の穴があり水の行き来を妨げない。かごの内側に防虫ネットをはった。
- * かごは、コントロール、サクラの枝葉、スギの枝葉、シュロ皮、竹筒、石のそれぞれ6個を設置した。

調査は、川は勤務校の近くの水田周辺で、海は京都大学フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所で行った。

川で出会った生き物



海で出会った生き物



*図4)

5. 自然認識を育むための授業実践

京都教育大学、及び、勤務校である八木町立吉富小学校で「海の生き物」を扱った授業実践を行った。

場所	教科	対象
京都教育大学	初等理科教育	大学生
八木町立吉富小学校	理科	小学6年生

理科の学習において「里」を意識したとき、生き物と環境とのつながりや自然とヒトとの関わりに関する学習展開をどう作り上げていくのかが大きな課題となってくる。そこで、多様性の宝庫であり、食生活を通してヒトの生活と大きく関わっている「海」を教材として取り上げ、このような課題に取り組むことにした。

6. 里川・里海の教材化

小学校学習指導要領 「理科の目標」⁵⁾

自然に親しみ、見通しをもって観察、実験などを行い、問題解決の能力と自然を愛する心情を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を図り、科学的な見方や考え方を養う。

「自然に親しみ」をもてるような活動を授業で想定したとき、その場所として身近な地域の自然を思い浮かべればよい。何も特別な自然を取り上げる必要はなく、児童の生活圏内に存在する自然を教材とすればよいのである。でなければ、「自然を愛する心情を育てる」ときに、具体的な対象を意識させることができないであろう。

【参考文献】

- 1) 環境省自然環境局(2004)、「里地里山」パンフレット
- 2) ミツカン水と文化センター(2003)、「里川の構想」
- 3) 国土交通省(2002)、「里浜づくり研究会」
- 4) 岡田ほか(1965)「新日本動物図鑑」、北隆館
- 5) 文部省(1998)、「小学校学習指導要領」